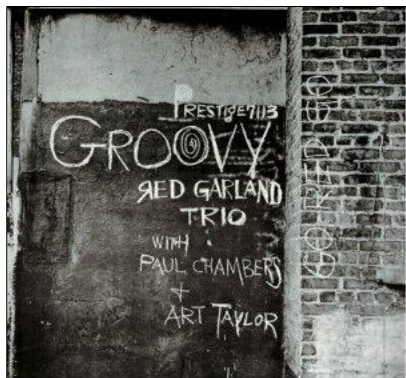


ジャズを長年聴いてきた方も、最近ジャズを聴き始めた方も、「名盤」と言われるピアノ・アルバムをきっかけにジャズが好きになった方は多いと思います。今回はそんなジャズ・ピアノの永遠の定番とも言える名盤・人気盤から選んだ7曲を聴いていきます。ジャズが至る所で流れている昨今、テレビや街中のカフェなどでも何気なく耳にする機会が多いこれらの名曲。もはや「耳タコ」になってしまっているかもしれませんが、今あらためてじっくり聴いてみると、これまで気づかなかった魅力の再発見があるかもしれません。

1



C Jam Blues / Red Garland Trio '8:20'

(GROOVY (1956-57))

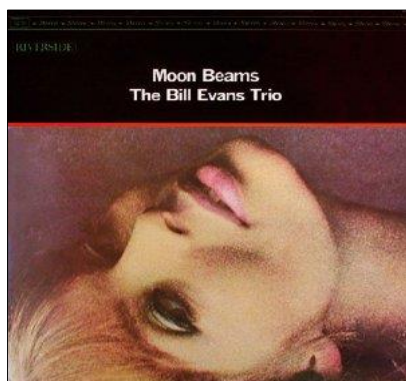
Red Garland (p), Paul Chambers (b), Art Taylor (ds)

50年代後期のモダンジャズにおけるピアノ・トリオの模範となっているアルバムで、ガーランドがプレスティッジ・レーベルに残した最高傑作。本日紹介する”C Jam Blues”の良さだけが強調されがちなアルバムだが、他の収録曲でもタイトル通りグルーヴィーでファンキーなトリオ演奏が繰り広げられる。

”C Jam Blues”は1942年にデューク・エリントンにより作曲されたスタンダード・ナンバー。ころころと転がるようなガーランド特有のフレーズ、独特のブロックコードによる「合いの手」など、ピアノ・トリオの魅力が凝縮された必聴曲。

(Prestige)

2



Polka Dots And Moonbeams / Bill Evans Trio '5:02'

(Moon Beams (1962))

Bill Evans (p), Chuck Israel (b), Paul Motian (ds)

リバーサイド・レーベルにはビル・エバンス黄金期の素晴らしいトリオの作品群が残されているが、本作はベースにチャック・イスラエルを迎えて録音されたリバーサイドの最終作。全編がミディアム～スローな曲で構成され、その内容は言葉による表現が不可能なほどにひたすら美しく、センチメンタルで悲しい時に聴けば泣き出してしまうと言われるほど。”Polka Dots And Moonbeams”はフランク・シナトラがトミー・ドーシー楽団で唄いヒットした、ジャズでも人気の高い曲。その中でも本アルバムはメロディが際立って美しい、極めつけの名盤・名演。

(RIVERSIDE)

3



You And The Night And The Music (あなたと夜と音楽と)

/ Bill Evans with Philly Joe Jones '7:23'

(GREEN DOLPHIN STREET (1962))

Bill Evans (p), Paul Chambers (b), Philly Joe Jones (ds)

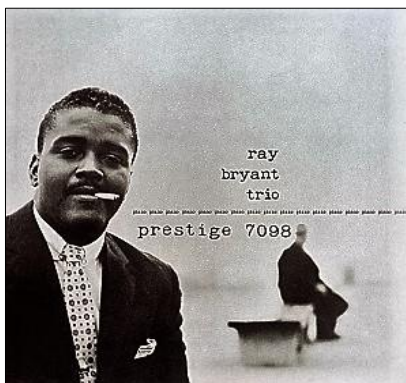
録音当時はお蔵入りし20年後にリバーサイドから公表されたというアルバム。

ポール・チェンバース、フィリー・ジョー・ジョーンズをバックにエヴァンスが明快なタッチでリラックスしたプレイを繰り広げる初期の快演集。

某ジャズ評論家が、数ある「あなたと夜と音楽と」の中でこのアルバムがベストであると甚く気に入る、自分だけの”密かな名演”として悦に入っていたところ、突然日本たばこ産業のテレビCMに使われ全国に広く知れ渡ってしまった事に大きなショックを受けたとか・・・

(RIVERSIDE)

4



Golden Earrings / Ray Bryant Trio '4:50'

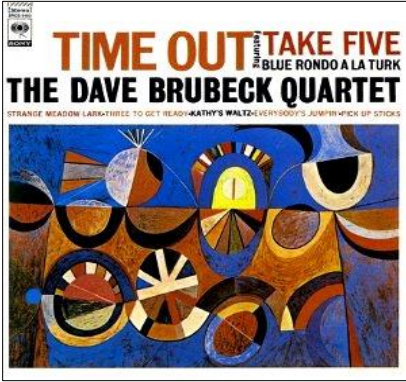
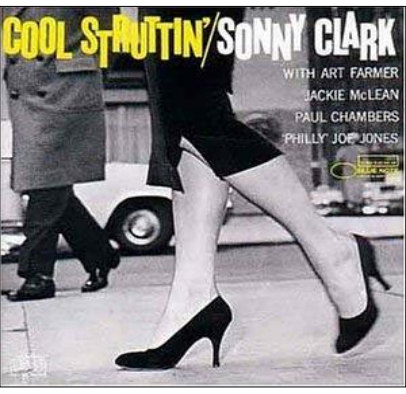
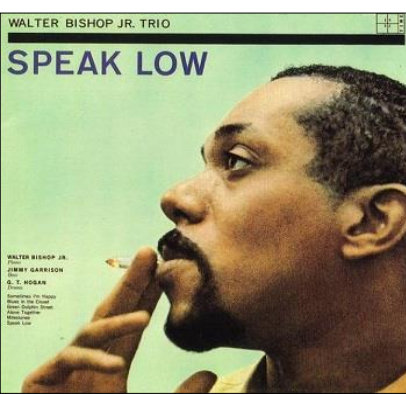
(Ray Bryant Trio (1957))

Ray Bryant (p), Ike Isaacs (b), Specs Wright (ds)

ロマンティシズム溢れる名演が並ぶ、レイ・ブライアント・トリオ屈指の名盤。

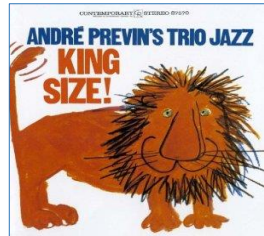
ブルースを基調とした、エレガントなピアノ・リズムが魅力。典型的な演奏スタイルでアレンジが少ないため聴きやすいが決して軽くはなく、むしろ深みと滋味溢れる「ジャズの王道」のようなアルバム。そのためジャズ入門者にもよく薦められる。中でも”Golden Earrings”は「モダン・ジャズを聴くならこの1曲」として定番のように上位に挙げられる。哀愁とロマンに満ち、ブライアントがジャズ・ファンの心を虜にした決定的名演。

(Prestige)

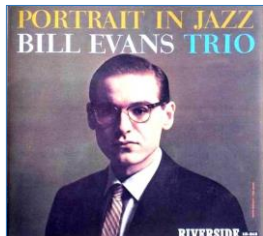
5		Take Five / The Dave Brubeck Quartet '5:26' (TIME OUT (1959)) Dave Brubeck (p), Paul Desmond (as), Gene Wright (b), Joe Morello (ds) デイヴ・ブルーベックの不滅の金字塔アルバムだが、永遠の名曲 "Take Five" を作曲したポール・デズモンドの功績も極めて大きい。めくるめく変拍子とポップなメロディ・ラインが心憎いほど見事に調和した、ブルーベック・カルテット黄金時代を象徴する大傑作。タイム(拍子)をアウトさせ「5拍子でいこう!」で出来たのが "Take Five" で、変拍子でこれほどまでにスイングする曲は他に無いと言われる。そのエキゾチックな曲想もあって一躍ヒットし、後年テレビCMにも使われたため、アルト・サクスが奏でるサビのメロディはジャズ・ファン以外にも広く知られている。 (COLUMBIA)
6		Cool Struttin' / Sonny Clark '9:22' (COOL STRUTTIN' (1958)) Sonny Clark (p), Jackie McLean (as), Art Farmer (tp), Paul Chambers (b), Philly Joe Jones (ds) 有名なブルーノート1500番台シリーズの1枚として、1958年に発表された典型的ハード・バップ・アルバム。当初は本国アメリカでは「これが本当に売れるのか?」と言われたが日本では大ヒットとなり、一部のハードコアなジャズ愛好家たちの間ではカルト的なアルバムとなっている。"Cool Struttin'" はソニー・クラークの代表曲であり、ゆっくりと進行するブルース調のピアノ、クールかつ明快で高揚するようなメロディーを奏でるアート・ファーマーのトランペット、激しいながら堅実なジャッキー・マクリーンのアルト・サクスなど、非の打ちどころのないクインテットの名演。 (Blue Note)
7		Sometimes I'm Happy / Walter Bishop Jr. Trio '6:24' (SPEAK LOW (1961)) Walter Bishop Jr (p), Jimmy Garrison (b), G.T. Hogan (ds) アニタ・オデイの伴奏により頭角を表したビショップがコレクター垂涎のマイナー・レーベル Jazztime から発表した元祖「幻の名盤」。日本のジャズ喫茶黄金時代を築き上げ、ジャズ入門者から耳の肥えたマニアックなファンまで、幅広く親しまれてきた超人気盤。オープニングを飾る "Sometimes I'm Happy" は、ガツン! と来るバスドラムとうねる様なベースのグルーブ感が何ともし心地良く、そこにビショップのピアノが絶妙にハマる。大口径のスピーカーで大音量で体感したい名演。 (JAZZTIME)

曲名 / アーティスト '演奏時間' (アルバム (録音年)) *右下 () はレーベル名

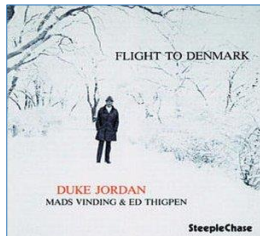
その他の Jazz Piano 名盤・人気盤(ほんの一例)



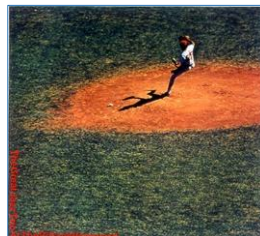
KING SIZE!
Andre Previn Trio



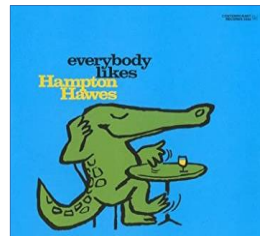
PORTRAIT IN JAZZ
Bill Evans Trio



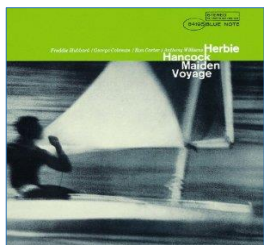
FLIGHT TO DENMARK
Duke Jordan Trio



At The Village Vanguard
The Great Jazz Trio Vol.1



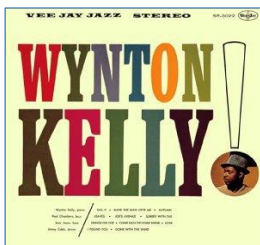
Everybody Likes
Hampton Hawes



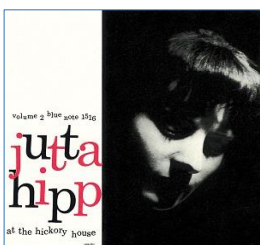
Maiden Voyage
Herbie Hancock



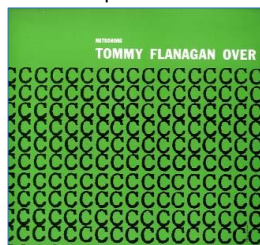
WE GET REQUESTS
Oscar Peterson Trio



Wynton Kelly!
Wynton Kelly



AT THE HICKORY HOUSE
JUTTA HIPPI



Overseas
Tommy Flanagan Trio